

女鬼、女神と娘：高雄加工輸出区の文史翻訳と地域女性労働の記憶の再生産
著者：黄羿綺、朱嘉倪

所属機関と職名：中山大学社会学科学生

Email：aa0906076500@gmail.com

資料提供：李沂誼、朱嘉倪、黄羿綺

写真撮影：陳乙嘉

2025年春、高雄市労働局が開催した「労働女性記念公園春祭り」イベントは、かつて忘れ去られ、さらには汚名を着せられた歴史が再び都市の記憶に浮かび上がるきっかけとなりました。この歴史は「高中六号事件」に由来し、この事件では13歳から30歳までの未婚女性25名が不幸にも命を落としました。

台湾の民間習慣において、未婚女性は祖先の位牌に列せられることができず、家族の墓地に埋葬されることもできません。そのため、これらの25名の未婚の犠牲女性は、不幸の象徴と見なされることが多いのです。民間では、

独身男性が事故現場を通過すると霊的な影響を受ける可能性があるという噂

も広まっており、この事件を記念して設立された「二十五淑女墓記念公園」も独身男性の禁地と見なされています。これらの言説は、無意識のうちに未婚の犠牲女性に対する社会の否定的な感情を深め、故人が再び評価やレッテルを受けるだけでなく、その家族にさらなる心理的負担を与える可能性があることを反映しています。これは、社会が事故や死に直面する際に、依然として性別や婚姻状況に強く影響される現実を示しています。

このような背景の中、国立中山大学社会学部の王梅香教授と林伝凱教授が指導する学生チームは、『一日、一生』ストーリーマップを行動の出発点として、旗津の女工の生命の物語を再構築し、「高中六号事件」の歴史的文脈に位置づけました。この結びつきは、女工のたくましさや献身のイメージを再構築するだけでなく、参加者に女性、労働、犠牲に関する集団記憶を再考し、あらためて見つめ直すことにもつながりました。

しかし、春祭りのイベントの前から、一連の文史研究はすでに活発に行われており、これは夏期集中講座の開設に起因しています。最初は、ただ教師たちの期待から始まりました——この土地で生活し学ぶことを選んだ以上、ここで起こった重要な事件について基本的な理解を持つべきだというものでした。講座は旗津を出発点とし、学生たちを地域の歴史と記憶の中へと一歩ずつ導きました。この学生たちや高雄の地元の人々にとって、「高中六号事件」は非常に馴染みのないものでしたが、それは私たちがよく知る生活圏で実際に起こったことです。この歴史は長年封印され、記録や関心が欠けていたため、非常に残念です。

このような遺憾と責任感から、十数名の学生がこの歴史的行動に参加することを決意した。講座は関連する場所を訪れ、当事者や地元住民の記憶を聞くことで、事件の全貌を少しずつ組み立てていきました。教師たちの指導の下、私たちはさらに展示、ワークショップ、ガイド、絵本など多様な形式でこの歴史を提示し、それを遠くて抽象的なものではなく、簡単で理解しやすく、生活に密着した形で表現しました。これにより、大衆は単に読書を通じて歴史の記憶に入るだけでなく、実際の体験を通じて身体で感じることができるようになりました。

これは単なる授業ではなく、地域の記憶との深い対話であり、土地の一部としての責任を実践する一つの方法です。この行動を通じて、私たちは歴史を



知るだけでなく、歴史の再構築と継承にも参加し、かつて忘れ去られた物語が再び見られ、記憶されるようにしました。

図一：学生たちは授業を通じて、高雄加工輸出区を実際に訪れ、女工たちが食事をしていた「第一レストラン」の前で記念撮影をしました。（撮影日：2024年6月25日）

次に、時間の順に、授業から派生した行動実践を一つずつ紹介します。ストーリーマップ『一日、一生』を完成させた後、私たちは物語を語り、手作り体験を通じて、より多くの人々に旗津女工の物語を異なる方法で親しんでもらうことを試みました。最初のイベントはクリスマスイブに開催され、ハマシンシステムと教育部USRプロジェクト「持続可能な転換に向けて：都市共

事館」との協力により、高雄原愛国婦人会館で温かい親子手作りイベント「樹が語る女工の一生」を行いました。

私たちは物語の内容から出発し、親と子供たちに女工たちの日常生活や「高中六号」事件の経緯を一步ずつ理解してもらうよう導きました。手作り体験のセクションに入ると、「折り紙のクリスマスツリー」の活動を設計し、参加者が折りたたみ、装飾する過程で、工場作業における高度に繰り返されるリズムの労働感を実感できるようにしました。この体験は、実際の工場の作業強度を簡略化したものですが、参加者は「毎日同じ動作をすることはどんな感じだろう？」と考え始めました。女工たちはこのような日々にどのように向き合っていたのでしょうか？また、参加者がより身近に感じられるように、現場には女工の制服も用意し、親子で写真を撮ったり、当時の女工たちが工場で働く流れを体験したりしました。

イベント中、一部の子供たちは同じステップを繰り返す必要があるため、退屈や疲れを感じ、「もうやりたくない」と親に甘えることもありました。しかし、当時の女工たちはそのように辛いと叫ぶ機会がありませんでした。イベントの最後に、子供たちに「作業過程」の感想を共有してもらうと、「女工たちは本当に大変だ！」という声がありました。このような世代を超えた交流を通じて、女工の物語は単なる歴史的知識ではなく、感じられ、理解される生命の経験となりました。そして、折り紙のクリスマスツリーの形は、繰り返しの中でも立ち続ける女工たちを象徴し、彼女たちが単調な労働の中で家庭や夢を支え続ける日常を表しています。

第二の行動は、労働博物館と協力して開催されたテーマイベント「女工の夢をつなぐ」です。このイベントの目的は、より多くの人々が「高中六号事件」の歴史的背景とその背後にある深遠な社会的意義を理解し、記憶することです。歴史的状況を再現し、実地体験を通じて、当時の社会環境を振り返るだけでなく、なぜ若い女性労働者たちが完全な資料もなく、社会的偏見の

二重の影響を受けて、汚名を着せられ、歴史の隅に沈んでしまったのかを考え直すことを試みました。各イベントは「ストーリーマップ+手作り体験」という二つの軸を中心に進行しますが、今回は特別な突破口として、没入型のインタラクティブデザインを採用し、観客が単に物語を聞くだけでなく、「物語に入る」ことを目指しました。高度にリアルな時代の雰囲気を作り出すために、視覚、聴覚、味覚のすべてに細かい配置を行いました——入口には打刻時計を設置し、スタッフは女工の制服を模した服を着て、工場の出勤・退勤の儀式感を演出しました。聴覚的には、当時の出勤のベルの音を流

し、社長の指示の声や当時流行していた曲を組み合わせて、まるでその生産ラインが回っていた時代にタイムスリップしたかのように感じさせました。

そして、味覚の面では、記憶に残る爆弾パンや統一肉燥麺を用意し、参加者が「歴史を聞くだけでなく」、味を通じて歴史を記憶できるようにしました。これらの細部は小さなものですが、女工たちの実生活の一部であり、私たちが最も再現し、重視したい部分です。

私たちが「没入型体験」をイベントデザインを中心に選んだ理由は、伝統的な知識の伝達と一般の人々との距離を打破し、歴史が冷たい事実として語られるのではなく、「感じられる」生命の経験となることを望んだからです。女工の物語はこれまで主に学術資料や口述歴史に封じ込められており、一般の人々にとっては遠くて抽象的で、共鳴や興味を引き起こすことが難しいものでした。しかし、視覚、聴覚、味覚、さらには身体が多感的な参加を通じて、私たちは参加者が単に「理解する」だけでなく、実際に「旗津女工の当時の生活シーンに入る」ことを試みました。彼女たちが工場で繰り返し労働する身体感覚や感情状態を体験することができるようにしました。

このイベントには特別な点があり、イベント期間中に韓国の釜山大学の学生が訪問し、観察しました。私たちはビーズブレスレットの体験活動を用意し、異なる文化的背景を持つ学生たちにも、この歴史の中で女工が示したレジリエンスと創造性を体験してもらいました。釜山からの学生たちは、韓国でも女性労働者に関する多くの歴史を聞いたことがあるが、このように深く理解し体験する機会は少なかったと共有しました。この異文化間の交流は、単なる学術的な観察ではなく、記憶の共鳴と理解のつながりを生むものでし

た。このつながりを通じて、私たちは女工の物語が地元だけでなく、世界のさまざまな場所で見られ、尊敬されることを期待しています。



図二：韓国釜山大学社会学科の教員と学生も一般の人々と共に、没入型女工生活体験に参加しました。（撮影日：2025年1月4日）

最後に、冒頭で触れた「労働女性記念公園春祭り」イベントに戻ります。この歴史への関心を持続させるために、私たちは高雄市労働局が主催する春祭りに参加し、多様な形式の文化的解釈を通じて、一般の人々に歴史を振り返り、旗津女工の生命の物語を感じてもらうことを目指しました。

私たちは参加者を当時の時空背景に導き、女工たちの辛労とたくましさをもつて感じてもらおうとしました。クイズのセクションでは、当時の女工の生活についての想像をさらに刺激しました。例えば、女工たちの昼食のお弁当の卵は鶏卵ではなく、アヒルの卵だったという細部が、歴史をより具体的にしました。特に選ばれた「雪芙蘭ハンドクリーム」と「統一肉燥麵」を賞品として用意し、口述歴史に記載された女工の日常を反映させ、歴史の記憶がインタラクションの中で触れられるようにしました。

ストーリーマップのガイドや共有に加えて、「ビーズ手作り体験」も今回のイベントの大きなハイライトとなりました。一般の人々はビーズのコースターやブレスレットを自分の手で作り、過去の女工たちが生産ラインで繰り返し労働する辛さを体験しました。今日、私たちは作品の美しさや完成度に集中するだけですが、過去の女工たちは注文のプレッシャーの中で残業し、家

計を維持するために様々な職業病に直面していました。この体験は単なる手作りではなく、過去への敬意と省察の場でもありました。

この一連の行動は、教室からコミュニティへ、歴史から生活へ、ストーリーマップから絵本制作へと広がり、私たちが行っているのは単なる歴史の記録ではなく、忘れ去られた声や姿を呼び戻す試みです。旗津女工の物語はかつて沈黙していたかもしれませんが、誤解されていたかもしれませんが、何度も物語を語り、ガイドし、手作りし、参加することで、この歴史を再び見えるようにし、より多くの人々が新しい視点と感覚で理解できるようにしました。

これは過去を振り返るだけでなく、未来への警鐘でもあります。微小でありながら確固たる労働は、決して見過ごされるべきではありません。歴史の隙間で静かに尽力してきた女性たちは、書かれ、聞かれ、記憶されるべきです。これらの行動は一つの授業から生まれましたが、その種は私たちの生活の中に静かに広がり、私たちのいるコミュニティや、より多くの人々が関心を持ち、議論する場に根付いています。



図三：私たちは労働女性記念公園で一般の人々と女工手作り体験を行いました。（撮影日：2025年3月15日）

私たちが彼女たちの名前を忘れず、その時代の重みを忘れないことを願っています。この関心が活動の終了にとどまらず、より深く、より広い社会的対話へと続くことを願っています。今後も私たちはストーリーマップ、創作、行動を通じて、より多くの人々の心に入り込み、記憶がつながりの力となり、歴史が私たちの生活の中で本当に生き続けることを目指します。